

# 議長賞

堺市立 浜寺東小学校 六年

江尻 結良

## 明るい社会に向かって私の決意

毎日のように、暗いニュースが耳に入ってくる。作文を書くにあたり、犯罪や非行のない社会にするにはどうしたらいいのか、考えてみた。すると、お母さんが

「話せる環境を作ってあげる事かな？」

と言った。お母さんの子どもの頃は、サザエさん家族のように、おじいちゃんおばあちゃんがいて、親せきやみんなでご飯を囲みながら、色々な話をしていたそう。便利な世の中になり、電話やメールで話すことが増え、その分目を見て話す機会が減っているんだと思った。

私は低学年の頃、何をしてもうまくいかず、情緒が不安定で頑張ろうとすればするほど空回り、友達関係で悩んでいた時があった。周りからすれば、ちょっとしたおふざけの気持ちだったかもしれない。けれど私にとってはとても重たく、気づいた時には、身体に異常がでていた。お母さんは毎日学校から帰ってくると、

「今日はどうだった？」

と聞いてくれる。今考えると、そのひと言があったから話すこと

ができたのだと思う。私はお母さんの顔を見た瞬間涙があふれ出し、家中ひびきわたるほど大泣きしたことを今でも覚えている。表面上では笑顔で、何もなかったかのように振る舞っていたつもりだったが、お母さんは私の様子がおかしいことに気づいていた。話すことで心に押し殺していたものが、一気にすーっとでていくのがわかった。

「ノートの字は汚かったし、筆箱の中も真っ黒。」

とお母さんに言われ、まだ当時のノートがあったので、私は恐る恐る開いてみた。たしかに字は読めないほど汚く、ノートも落書きでいっぱい、消しごむは鉛筆でさしたあとがたくさん残っていた、私はハツとなった。

みんな弱い、だから支えあいながら生きていく。

「結良大丈夫？」

「何でも言っただけ。」

今思い返すと、友達や先生、家族からのひと言が私にとって大きな救いだった。毎朝、

「おはよう！今日はいい天気だね、いってらっしゃい。」

「結良ちゃんおかえり。」

と地域の方が声をかけてくれる。私はあいさつをかわす。何気ないコミュニケーションがとても大事だと言うことを気づかせてくれた。辛いことがあっても一人で抱え込まず、甘えよう、毎日話そう、そう思うようになった。そして、私自身も困っている人がいたら声をかけよう、一歩踏み出す勇気を持つとうと心に決めた。

「大：丈夫ですか？」

小学六年生の春、私は勇気を出して声をかけた。見知らぬ人、正直ドキドキした。車いすが段差のあるところで動けなくなって困っているようだった。私は自転車を止め、おばあさんが乗る車いすを押した。すると、

「ありがとう、助かったわ」

とおばあさんから笑顔とお礼の言葉をもらった。このことは、私の心の中から消えることはないだろう。私はおばあさんが見えなくなるまで、笑顔で見送った。その時の私の心はなんだか温かく、おばあさんも同じ気持ちだったらいいなと思った。

昭和から平成、令和に時代が変わっていく中、人が人に関心を持つことが少なくなり、繋がりも薄れているのではないだろうか。今の時代、サザエさんのような家族の繋がり、地域との繋がり、日本の古き良き文化として、これから先も大切にしていかなければ

ばならないと思った。

一人一人が人に関心を持ち、繋がり、寄り添うことで、ちょっとした変化でも気づく事ができれば、犯罪や非行の種を減らすことができるのではないかと思う。このような問題は、算数のような公式があったり、正しい答えがすぐにでるわけでもない。次世代を担っていく私達がしっかりと向き合い、繋がりを大切に明るい輪を広げていくことができれば、その輪はいつかきつととても大きなものに成長するだろう。みんなの手を取り合える、温かい明るい社会を築いていくために、今自分にできることを考え行動していこうと、私は決意した。私の第一歩が、未来へと繋がることを願って。

